

富山市山田村における空家問題等に関する住民意識調査 －「富山市空家等対策計画」と山田村の方向性－

Residents' awareness survey on vacant house issues in Yamada Village, Toyama City
- "Measures for vacant houses in Toyama City" and Yamada Village -

川本 聖一*	武部 奈津世**	坪田 はるか**
KAWAMOTO Seiichi	TAKEBE Natsuyo	TSUBOTA Haruka

According to the housing and land statistics survey, the number of vacant houses nationwide in 2018 was about 8.46 million. The vacancy rate is 13.6%. This is a record high, an increase of 0.1 points from the 2013 survey. This trend is expected to continue. This is a big social problem in Japan.

Yamada Village in Toyama City is an intermediate mountainous area located southwest of the central part of Toyama Prefecture. In 1950, it was designated as a depopulated area. Since then, the population of Yamada Village has been declining and outflowing. By 2060, the population is expected to be one fifth of that of 2010. In this situation, the village cannot be continued. The challenge is to accept as many people as possible from the outside. Residents want to use many empty houses in Yamada Village for that purpose.

At the request of the “Yamada Village Urban Rural Exchange Council”, we conducted a survey of residents' awareness. According to the survey results, the residents are generally in favor of acceptance. They want to make effective use of empty houses. They want to accept people who value interaction with them. Based on this result, we organized what will become important to Yamada Village in the future.

- Village clerk about unoccupied houses is required
- The “resident agreement on vacant homes” is effective
- Special measures such as tax incentives and subsidies are desired when vacant houses are used for the community.
- A promotion organization that uses vacant houses is necessary.
- Support and cooperation of “Toyama City unoccupied house public-private partnership meeting” is necessary

Keywords : City and countryside Vacant house Population decline Emigration
Resident awareness

* 富山国際大学 現代社会学部 教授・博士 (工学)

Prof., Faculty of Contemporary Society, Toyama University of International Studies, Dr.Eng.

** 富山国際大学 現代社会学部 学部生 (3年)

Student, Faculty of Contemporary Society, Toyama University of International Studies.

1. はじめに

(1) 研究の背景

住宅・土地統計調査¹⁾によれば、平成 30 年時点での全国の空家数は約 846 万戸となり、住宅の総数 6242 万戸に占める空家の割合（空家率）は 13.6%となった。平成 25 年の調査より 0.1 ポイント増加して過去最高となった。この傾向は今後も続くことが予想される。空き家は適正に維持管理されないと、倒壊の危険や、周囲の景観及び住環境への悪影響、治安の悪化などの問題が生じる可能性があるのは周知のとおりである。国はこのような状況を踏まえ、平成 27 年に「空家等対策の推進に関する特別措置法」²⁾を施行し、空家対策の取り組みを強化した。富山市は平成 27 年度に「富山市空家基礎調査」³⁾を実施し、5000 件を超える空家を確認している^{注1)}。その結果を踏まえて、「空家等対策の推進に関する特別措置法」第 6 条に基づく「富山市空家等対策計画」⁴⁾（平成 29 年 3 月）を作成している。

(2) 研究の目的と意義

「富山市空家等対策計画」においては、富山市は「都心地区」や中山間地域など、多様な特性を持った地域が含まれることから、地域の特性や状況に応じた空家対策の検討が必要であるとしている。そこで、今般行った中山間地の代表事例である山田地区の空家等に関する住民意識調査の結果と富山市全体と比較して報告する。また、今後山田村における空家対策および移住推進を、「富山市空家等対策計画」を踏まえて検証する。一口に空家対策といっても、「都心地区」と中山間地域とは全く異なる側面がある。中山間地である山田地区の状況と今後の対策を明らかにする。

2. 山田村の概要

(1) 山田村の位置 (Figure 1)

富山市山田村は、富山県の中央部から南西によった、呉羽丘陵が飛騨山系に連なる牛嶽山麓に位置し、標高 100 から 1000 メートルの山峡にある。東は八尾町、南は利賀村、西は庄川町と砺波市、北は婦中町に接している。総面積 40.92k m²、東西 12km、南北 16km で、村の 4 割程度は急峻な山地が占める。それ以外は丘陵性の地形で、山田川・赤江川・和田川の両岸に 22 の集落が点在している。



Figure 1 富山市山田村の位置 注2)

明治 22 年市町村制により山田村と命名され 25 集落に行政を区画し、2005 年 4 月 1 日に、富山市、大山町、大沢野町、婦中町、八尾町、細入村と合併し、富山市となった。都市部の経済成長の中で、昭和 30 年

代後半から人口減少が顕著となり4集落が廃村、昭和45年には過疎地域に指定された。平成元年には村政100周年を迎えている。

12月中旬から3月下旬までの約3ヶ月間が積雪期間である豪雪山村であるため、主要な産業は水稻中心の農業と林業であるが、隣の八尾町に八尾中核工業団地の工場に勤める人もおり、兼業農家が多い。また、農用地開発事業で畑を造成し、大根や馬鈴薯などの産地育成に努めている。村では、昭和40年代から観光開発に力を注ぎ、昭和46年に村営の牛岳温泉スキー場を開発し、平成2年に村内外の人々のための健康休養施設として、牛岳温泉健康センターを開設し、観光客の誘致にも力を入れている。

(2) 山田村の人口動態

Figure 2は、2010年と2015年の国勢調査に基づいて、現在の出生率(1.324)を用いて、2060年までの人口推計である。推計に当たっては、「小地域ごとの簡易人口推計ツール」^{注3)}を使用した。

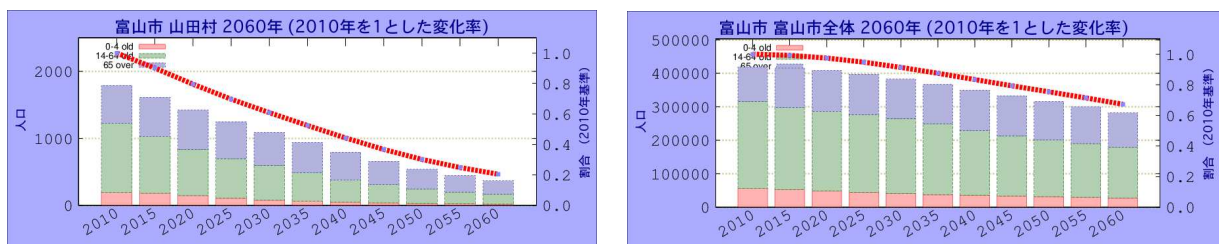


Figure 2 山田村と富山市全体の人口推計比較

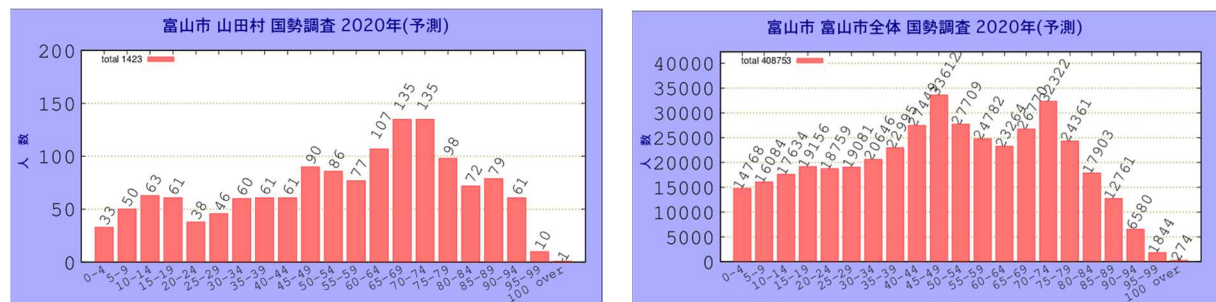


Figure 3 山田村と富山市の年齢構成別人口比較 (2020年)

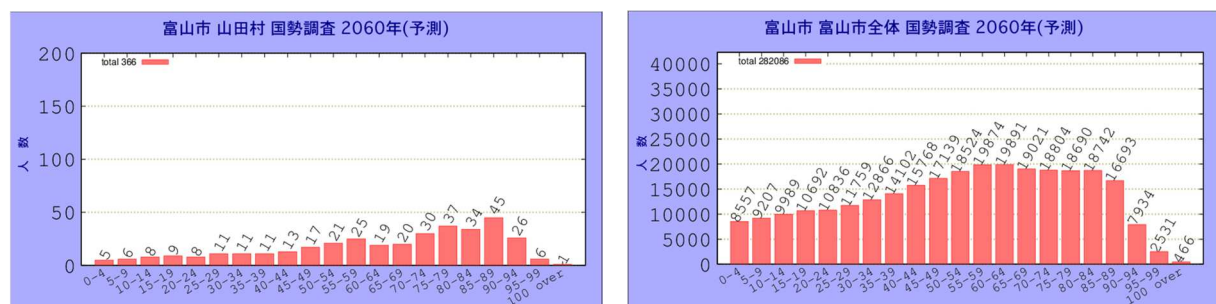


Figure 4 山田村と富山市全体の年齢構成別人口比較 (2060年)

村の統計資料によると、現在の人口は約1400人であり、我々が作成したFigure 2の推計値はそれとほぼ等しい。この結果によれば、2060年には400人を切り(棒グラフ参照)、対2010年比で2割程度まで減少する結果となっている(折れ線グラフ参照、数値は右目盛)。Figure 2右は富山市全体を示している。富

山市全体でも当然人口減少するが、対 2010 年比で 6 割弱の減少にとどまる。いかに山田村が激しい人口現象地域であることがわかる。また、山田村における 14 歳以下の子供の人口減少が、富山市全体と比較して著しく大きい。

Figure 3 は 2020 年（推計）の山田村と富山市全体の年齢別人口構成である。富山市全体では、団塊世代と団塊ジュニア世代のボリュームが見て取れるが、山田村では、団塊ジュニア世代のボリュームはなく、生産年齢の比率が少ないのが特徴である。Figure 4 は 2060 年（推計）の山田村と富山市全体の年齢別人口構成である。山田村では、生産人口が少なく、子供の人口が少ないというこの傾向は一層深刻なものとなる。

前述したように、山田村も富山市全体も人口減少は避けられないのだが、山田村の子供の減少は著しい。Figure 5 は、2060 年に向けての小学生の人口推計の比較である（小学生人口は右目盛）。山田村、富山市全体ともに現在は、総人口の 5 % 程度が小学生人口であるが、2060 年において、富山市全体ではその割合はあまり変化がないが、山田村のその割合は著しく減少する。

ここで、山田村に外から移住があり少しあった場合を想定してシミュレーションを行ってみる。Figure 6 は、山田村に 5 歳～10 歳の子ども 1 人を持つ 3 人家族が毎年 2 組移住してくることを想定した予測である。人口減少は、それでも対 2010 年比で 35 % 程度まで減少してしまう。減少はくい止めることはできないのだが、Figure 5 の右のグラフの小学生人口の推移が示す通り、2030 年ころから小学生人口の減少はおさまる。今後 50 年、人口減少は継続していくが、その後の 100 年先を見据えたときに希望を残す結果となっている。この結果が示すように、今後の村の存続のためには、外からの移住の推進は待ったなしの状況である。

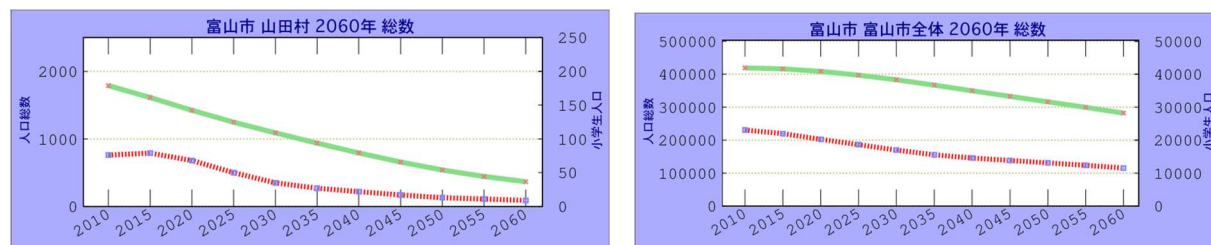


Figure 5 山田村と富山市全体の小学生人口の比較

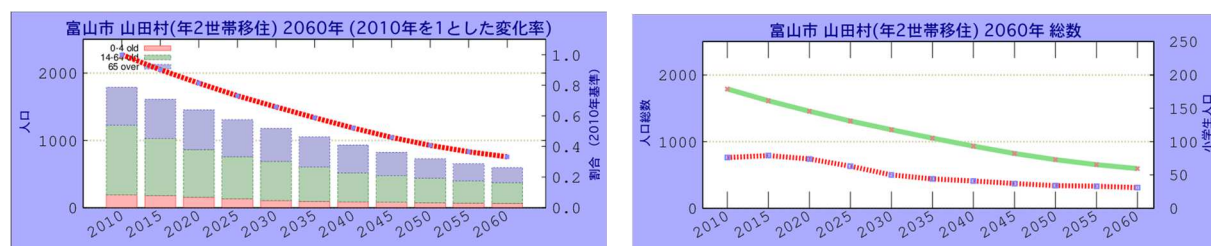


Figure 6 移住があった場合の山田村の人口推計

3. 住民意識調査の概要

山田村の人口推計で述べたように、山田村の人口減少は今までもそうであったように今後も継続してしまう。今後山田村を存続してゆくためには、外部からの移住者になるべく多く受け入れていく必要があるのである。一方山田村には多くの空家が存在する。空家は適正に維持管理されないと、さまざまな問題を

生じるが、外部から移住者を受け入れるために、空家を利用することは大変有効である。そこで、この調査では、人口減少が続くと予測される山田村の状況、空家の状況とその利用、移住者住民受け入れの考え方などに関して、山田村の全世帯に対して、意識調査を行った。

- ① 調査名称： 「空家対策に関するアンケート調査」
- ② 実施主体： 山田地域都市農村交流協議会
- ③ 実施時期： 2019年6月～7月
- ④ 実施方法： 各集落の「総代」を通して回収
- ⑤ アンケート内容： 以下に項目を示す。アンケート用紙^{注4)}は自由意見も記載できるようにした。
- ⑥ アンケート回収率など：
 - ・ 回答者及び世帯の属性
 - ・ 集落内の空家の状況
 - ・ 山田村の特性について
 - ・ 人口減少についての住んでいる集落の現状
 - ・ 新たな住民の受け入れについて
 - ・ 今回のアンケート調査について
- ⑦ アンケート回収率など： 配布部数 420、回答数 208、回収率 50%^{注5)}

4. 住民意識調査の結果

(1) 回答者及び家族の属性

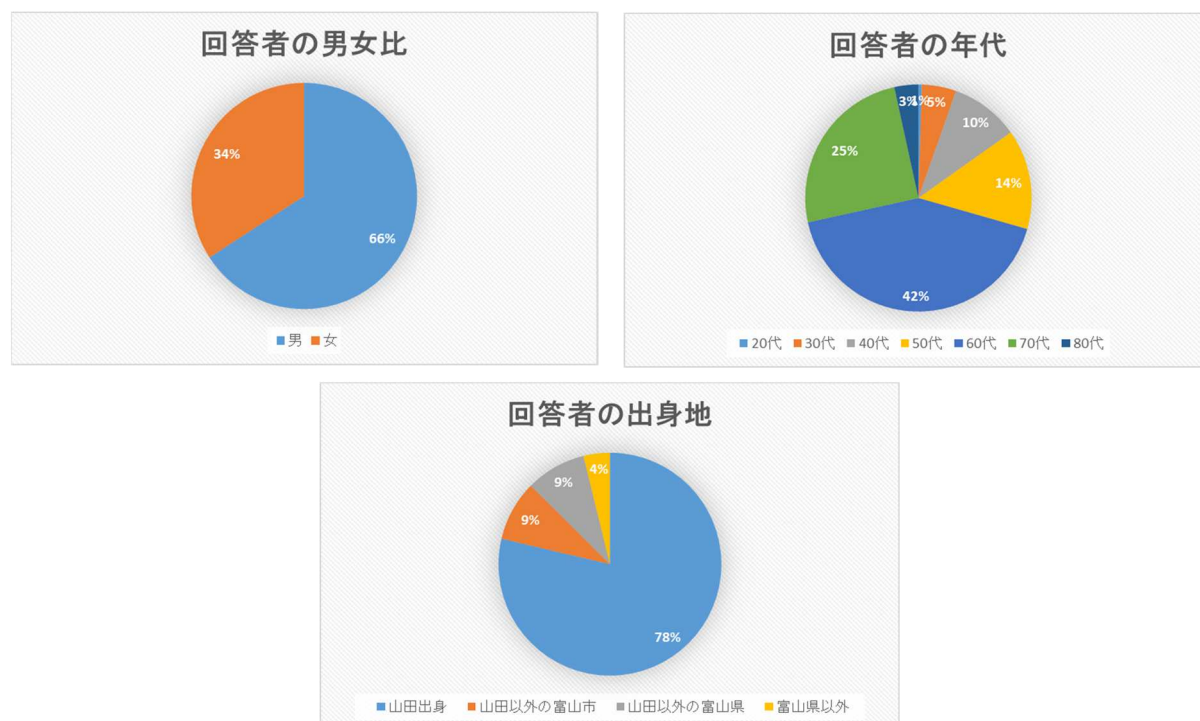


Figure 7 回答者の属性

アンケートは、各世帯に1部配布し、世帯の代表者の方に回答してもらった。その代表者は、男性66%、女性34%である。年齢は60代が中心で、50代～70代が80%以上を占める。出身地は山田村が8割弱を占

める。山田以外の出身者が少なからず存在するのは、結婚した嫁ぎ先が山田村であったなどの理由が考えられ、外部からの移住が多いわけではない（Figure 7）。家族構成は、夫婦のみの2人の構成が多いが、2世代以上の3人以上の世帯もまだ多い（Figure 8）。

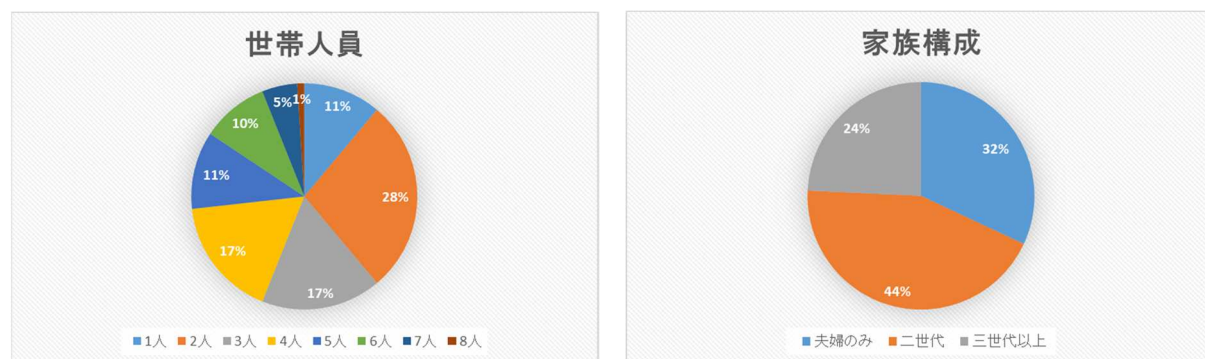


Figure 8 回答者の世帯

(2) 人口減少に関する意識 (Figure 9)

集落の現状に対しての関心事でいちばん多い事項は「少子高齢化」である。人口推計で示したように、山田村が少子高齢化により、人口減少が進んでいることは、住民意識としても関心が高い事項である。しかし、人口減少の進行度合いについては、65%が「徐々に進行」と考えている。先に示したように、このまま推移すれば、山田村の人口は、40年後には2010年比の5分の1になってしまうことや、これは富山市全体と比較すると大変特殊な状態であるという認識がなく、現実の状況と山田村の住民との認識には大きなギャップがあると感じる。人口が減らないとの回答が7%あるが、回答者に集落の偏りはない。

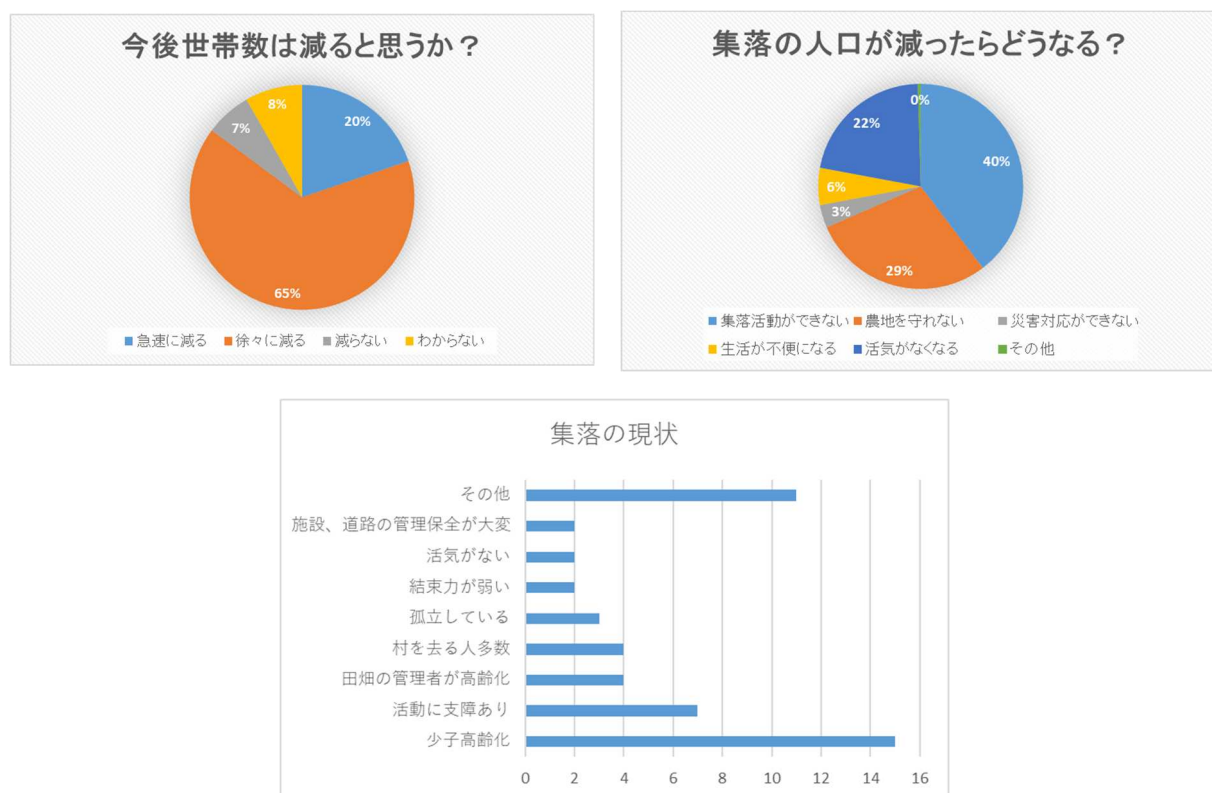


Figure 9 人口減少に関する住民意識

「人口が減ったらどうなるか？」という設問に対しての回答は、「集落活動ができなくなる。」という回答が 40%もあり、住民の「集落活動」に対する思いを感じることができる。この回答に関しても、集落に偏りはなかった。

(3) 山田村に関する意識

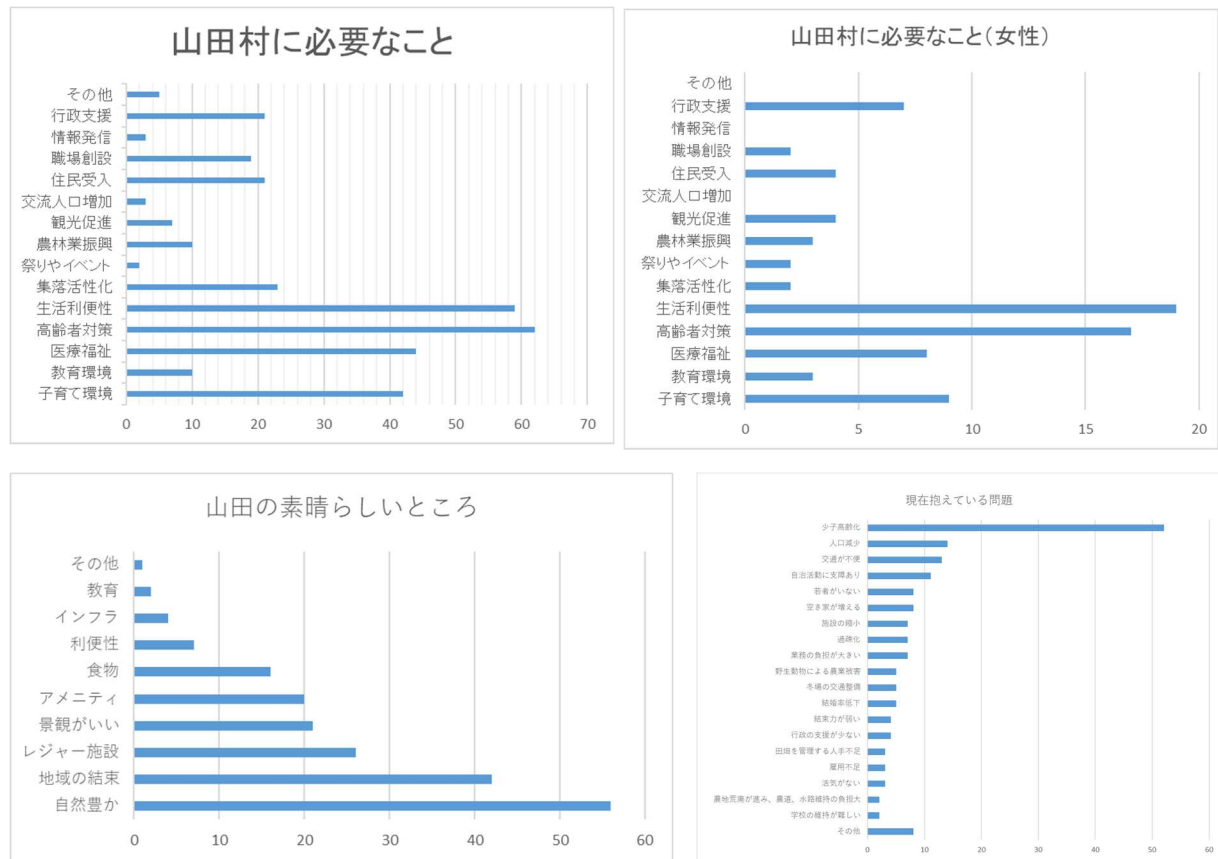


Figure 10 山田村の魅力と課題

Figure10 は、山田村の魅力と課題を挙げてもらった。自然が素晴らしいと思っている方が多いのは当然なのだが、それに加えて、人と人とのつながりや、村の結束を大切に思っているという結果である。また、少子高齢化問題は大きな問題として意識されていて、高齢化対策・医療福祉の改善を求めている。利便性の改善、子育て環境を重要視している。女性が回答者であっても、山田村に必要な項目の傾向は変わらなかった。各集落によっても回答に特性は見られない。

(4) 空家の状況

Figure11 は、回答者が住んでいる集落の空家の状況についての回答である。潜在的な空家も含めて集落には多くの空家があるとすべての住民が認識している。朽ちて使用できないと思われる空家の存在も 18%の方は感じている。そして、それらの空家に対して、朽ちて使用できないと思われる空家に対しては、解体を望んでいるし、しっかりした空家に関しては利用促進を望んでいる。

Figure12 は住宅用地として使用できる土地に関する回答である。集落には、住宅に利用することができる宅地も多く存在している。右側の棒グラフは、空家の活用に関する設問である。集落の空家に対して、宿泊などに使用すべきという意見がある。放置されている空家に対して管理してほしいという意見も多く

ある。これらの意見や要望をどのような手続きで、対応していけばいいのかわからないという意見が多い。以上の回答に関しても集落による特性は現れなかった。



Figure 11 集落の空家の状況



Figure12 集落の住宅用地と空家の活用

富山市全体の調査においても、利用されていない空家の積極的な活用については前向きな意見が多く^{注7)}、その一方で空家の利用や処分に就いてどのようにすればいいかわからないという意見が多い^{注6)}。空家の管理については、所有者が自ら管理している場合が65%^{注7)}、所有者が空家所在地から出て行ってしまった場合には、空家と所有者の距離が離れればなるほど、管理していない状況が多くなる^{注8)}。人口減少が続く中山間地である山田村は空家を放置される側の地域である。建物所有者が山田村から離れてしまい、山田村の住民は集落の空家の放置を住民は大変困っている状況である。

(5) 新たな住民の受け入れに対しての意見



Figure 13 新たな住民の受け入れについて

Figure 13 は新たな住民の受け入れに対しての意見である。受け入れ条件付きも含めれば、90%以上が肯定的な意見となっている。受け入れ条件でいえば、集落の活動について積極的に参加してほしいという要望が67%あり、山田村の人々が集落の活動をいかに重要視しているかがえる。これらに関して集落の偏りは見られなかった。

5. 集落に存在する空家の事例

このように山田村には各集落に空家が多く存在している。幹線道路沿いの湯集落と、山間部の清水集落の空家を2事例紹介する。

(1) 湯集落の空家事例 (Figure14)

以前、企業の研修所として使用していた3層建ての建物である。大広間、多くの個室、広い厨房、大小の浴室がある。すでに、移住者が使用していた経緯がある。現在は個人の所有となっていて、有効利用すべく、少しずつ手を入れている。例えば、多くの人を受け入れる宿泊施設としての利用が考えられる。



Figure 14 湯集落の空家事例

(2) 清水集落の空家事例 (Figure15)

以前は、設計事務所を営んでいた方の住宅である。屋根が一部分損傷しているが軒先部分のみであり、内部に漏水はない。トイレは洋式便器が設置されており、浴室もそのまま使用できる。ケヤキの立派な梁が使用されたとても立派な吾妻立ちの住宅である。すぐに利用することが可能である。外観からは屋根が破損していることもあり、利用できないと思われがちであるが、多少手を入れることによって十分利用可能な建物である。



Figure 15 清水集落の空家事例

6. 富山市の空家対策の基本方針と山田村

平成29年3月策定された「富山市空家等対策計画」では、地域の多様な主体との連携を図りながら問題解決に取り組むとしている。安全・安心で魅力ある住環境の実現を目標に、空家問題を建物固有の問題とするのではなく、まちづくりの観点からとらえようとする。また、「都心地区」や中山間地など多様な地域特性を踏まえて施策の方向性を検討するとしている。まさに山田村は、中山間地を代表する特性を持った地域である。山田村の人口動態、アンケート調査による住民意識の結果を踏まえて、市で作成した空家等対策計画の内容に即して、今後の山田村の空家対策の方向性に関して整理する。

「富山市空家等対策計画」では、以下6項目の対策を設定している。①空家に対する実態把握、②空家化の予防、③空家の適正な維持管理、④空家の利活用促進、⑤問題のある空家対応、⑥空家に関する相談体制である。これらの詳細な取り組みに関して山田村の方向性をTable 1にまとめた。

Table 1 富山市空家等対策計画と山田村

富山市の基本方針	富山市の施策の方向性	山田村としての施策
①空家に対する実態把握	データベースの有効活用	・空家所有者の処分の意向なども含めた 詳細情報が入手可能 ・ 個人情報のため、あまりオープンにはできない。
②空家化の予防	所有者の責務醸成	・個人間で情報提供しあうのではなく、あくまで村として、情報を受けて情報提供につなげたい。 ・「 空家に関する住民協定 」を作成し、住民へ意識醸成を図る。
	家屋の長寿命化	・山田村ではほとんどの建物において 耐震改修が必要 。 ・ 地域のために役立てる目的 であれば、費用助成を多く受けられる制度が欲しい。
③空家の適正な維持管理	所有者への情報提供	・「 空家に関する住民協定 」により、空家の所有者を明確にする村の取り組みが必要。
	地域連携した維持管理	・「 空家に関する住民協定 」により、維持管理・利用促進の実行促進
④空家の利活用促進	中古流通促進	・利用者の発掘から行動が必要 ・利用できる空家を使って移住促進 ・ 推進のための事業主体が必要
	利活用促進	・空家を中山間地の資源と考え、NPOや地域おこし協力隊の活動に役立てる。 ・推進のための事業主体が必要
	地域課題解決利用	・空家を中山間地の資源と考え、住宅以外への利用で地域の活性化に役立てる。 ・推進のための事業主体が必要
⑤問題のある空家対応	通報苦情の受付	・ 村の窓口 が必要で、その窓口は、市の相談窓口や外部の専門家につなぐ役目を果たす。
	所有者への連絡	・「 空家に関する住民協定 」により、空家の所有者を明確にし、その情報は、村の窓口で一本化する。
	除却の検討	・村の窓口と市の連携。
	特定空家への認定	
	安全代行措置	
⑥空家に関する相談体制	相談体制の整備	・「 富山市空家対策官民連携会議 」の活用
	外部の専門家との連携	

我々が実施したアンケートによれば、山田村の住民は人口減少の実態を気にかけて、それを少しでもくい止めるため、空家を有効に利用することに関してとても前向きであった。しかし、だれでも受け入れていいと思っているわけではなく、彼らが大切にしている住民間のつながりや村の活動を大切にしてくれる人に、移住してもらいたいもしくは関係してもらいたいと思っている。そこが「都心地区」との決定的な違いである。

このアンケート活動を通しての山田村に人々との活動を踏まえれば、山田村のような中山間地の空家対策で重要なポイントを以下に示し、本稿を締めくくることとする。

- ① 空家に関する村の窓口が必要（このアンケート活動を通して、窓口設置がされることになった。）
- ② 空家利用を促進する詳細な情報を入手しやすいがオープンなデータベースにはできない。
- ③ 「空家に関する住民協定」策定が有効であり、実現の可能性はある。
- ④ 空家を地域のために役立てる場合は、税制優遇、補助金支給など特別な措置が望まれる。
- ⑤ 空家を村の資源としてとらえ、それを活用してゆく推進主体が必要。「富山市空家対策官民連携会議」^{注8)}の支援や連携に期待する。

謝辞

本研究は、山田地域都市農村交流協議会の要請に基づいてスタートした。アンケート回収においては、各集落の総代の方々、都市農村交流協議会メンバーの方々の協力で高い回収率を上げることができた。付記して敬意を表す。

参考文献

- 1) 平成30年度 住宅・土地統計調査，総務省統計局，2018.10.1実施
- 2) 空家等対策の推進に関する特別措置法，法律第百二十七号（平二六・一一・二七），平成26年11月27日公布
- 3) 富山市空家基礎調査，富山市，平成27年度
- 4) 富山市空家等対策計画，富山市，平成29年3月

注

- 注1) 「富山市空家基礎調査」では、町内会からの情報提供、上下水道局が所有する水道閉栓情報、消防局の所有する空き家情報等に基づいて空き家と見られる家屋の存在を把握し、把握された家屋に調査員を派遣して目視等による状況確認を行い、その結果を取りまとめた。その結果、空き家と見られる家屋が5,736件確認された。
- 注2) 公益法人国土地理協会資料より作成。
- 注3) 名古屋大学大学院附属持続的共発展教育研究センター提供ツールにより作成

注4) アンケートに用いた調査票を以下に示す。

空き家対策に関するアンケート調査

現在の山田地域の人口は、1,400人程です。このまま行けば、10年後には、人口が1,000人を切るという人口予想が出されています。少しでも高齢化・過疎化に歯止めをかけ、少しずつ子供たちが増えるような地域を目指しませんか。

当協議会では、課題とされている空き家対策に取り組む、移住定住してくれる人を入れていきたいと考えています。

住民の皆さまからのご意見をいただきたく「空き家対策に関するアンケート調査」のご協力をお願いいたします。

山田地域都市農村交流協議会
会 長 石崎 貞夫

アンケート調査に回答される方におたずねいたします。

1 現在、お住まいの集落名を記入してください。

集落

2 あなた自身についておたずねいたします。（該当する項目に○印をつけてください。）

① 性別をおたずねいたします。

(ア) 男性
(イ) 女性

② 年齢をおたずねいたします。（年齢は、回答時点の状況でご回答ください。）

(ア) 20代 (イ) 30代 (ウ) 40代 (エ) 50代
(オ) 60代 (カ) 70代 (キ) 80代以上

③ 家族構成についておたずねいたします。（現在、同居している人数でご記入ください。）

家族の人数 人

【同居の内訳】 (ア) 夫婦のみ (イ) 2世代同居 (ウ) 3世代以上同居

④ あなた自身の出身地についておたずねいたします。

(例) (㊦) 石川 黒 金沢 ㊦、町、村

(ア) 山田地域出身
(イ) 山田地域外の富山市内出身
(田富山市・婦中町・八尾町・大沢野町・大山村・細入村)

(ウ) 山田地域外の富山県内出身 (富山県 市、町、村)

(エ) 富山県外の出身 (県 市、町、村)

3 集落内の空き家などの活用についておたずねいたします。

(該当する項目に○印をつけてください。)

① 空き家についておたずねいたします。（複数回答可）

(ア) 空き家はあるが、まだしっかりしている。
(イ) だいぶ朽ちた空き家がある。
(ウ) 今後、空き家が出てくるのではないかな。
(エ) 空き家を所有している。

② 空き家の対応についておたずねいたします。

(ア) 連絡先を明確にして欲しい。
(イ) 応対りなど管理して欲しい。
(ウ) 空き家になった場合、誰かに入居して欲しい。
(エ) 空き家は解体して欲しい。
(オ) わからない。

③ 近隣に宅地用地として使えるところはありますか。

(ア) 解体した跡地がある。
(イ) 解体すれば使えるところがある。
(ウ) 宅地に適している空き地がある。
(エ) 宅地跡として整備しても良い。

④ 空き家の活用についてご意見をお願いいたします。

4 山田地域についておたずねいたします。（該当する項目に○印をつけてください。）

(該当する項目に○印をつけてください。)

① 住み続けるにあたり、必要だと思うことは何ですか。（3つ選択してください。）

(ア) 子育て環境の充実 (イ) 教育環境の充実
(ウ) 医療・福祉の充実 (エ) 高齢者の対策
(オ) 生活の利便性 (カ) 集落の活性化
(キ) イベントや祭りの開催 (ク) 農林業の振興
(ケ) 観光の促進 (コ) 交流人口の増加
(サ) 新たな住民の受け入れ (シ) 職場の創設
(ス) 地域の情報の発信・受信 (セ) 行政の支援
(ソ) その他 (具体的に)

② 山田地域の素晴らしいところをご記入ください。

(例：自然が豊か、景色がすばらしい、野菜がおいしい、人情が厚い、集落の結束が強い等、なるべく具体的に記述してください。)

③ 山田地域が、現在抱えている課題についておたずねします。

(例：空き家が増えてきている、子供が少なくなった、自治活動に実効が出てきた等、なるべく具体的に記述してください。)

5 集落の現状についておたずねいたします。（該当する項目に○印をつけてください。）

① 今後、あなたの集落で世帯は減っていくと思いますか。

(ア) 急速に減っていく。
(イ) 徐々に減っていく。
(ウ) 当面の間、世帯は減らない。
(エ) わからない。

② 集落の人口が減ったらどうなると思いますか。（2つまで回答可）

(ア) 集落活動が維持できなくなる。
(イ) 農地を守れない。
(ウ) 災害など緊急時の対応ができない。
(エ) 生活に不便を生じる。
(オ) 活気がなくなる。
(カ) その他 (具体的に)

③ 集落の現状についてご意見ください。

お気づきのことがありましたら、ご記入ください。

6 新たな住民の受け入れについておたずねします。

(該当する項目に○印をつけてください。)

① あなたの集落で新たな住民を受入れてもよいですか。

(ア) 受入れても良い。
(イ) 仲介者（集落内の保証人等）がいれば受入れても良い。
(ウ) 一定期間、集落との意思疎通を図ったうえで受入れても良い。
(エ) どちらかといえば、受入れたくない。

② どのような方に来て欲しいですか。

(ア) 集落活動に積極的に参加してくれる方
(イ) 農作業に参加してくれる方
(ウ) できるだけ若い方
(エ) その他 (具体的に)

7 今回の「空き家対策に関するアンケート調査」へのご意見をお願いいたします。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

このアンケートは令和元年7月5日(金)までに、総代さんへ提出をお願いします。

回答は、山田地域都市農村交流協議会と富山国際大学川本教授が分析を行い、改めて空き家調査を実施する予定としています。

集落の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

このアンケート結果は、山田地域都市農村協議会の責任で保管します。

Figure 16 アンケートに用いた調査票

12

注5) 集落ごとのアンケート回収率をFigure 17 左に示す。各集落の位置関係をFigure17 右に示す。

集落名	部数	アンケート回収数	回収率(%)
1 谷	5	4	80
2 若土	22	15	68
3 鎌倉	13	10	77
4 小谷	8	3	38
5 赤目谷	11	5	45
6 北山	3	0	0
7 湯	40	20	50
8 中村	43	15	35
9 小島	43	12	28
10 上中ノ瀬	18	9	50
11 中ノ瀬	25	9	36
12 白井谷	13	9	69
13 沼又	13	11	85
14 牧	8	6	75
15 清水	25	7	28
16 今山田	9	6	67
17 宿坊	23	15	65
18 沢蓮	24	22	92
19 柳川	11	8	73
20 城山	18	4	22
21 竹ノ内	27	10	37
22 中村前田	18	8	44
合計	420	208	50

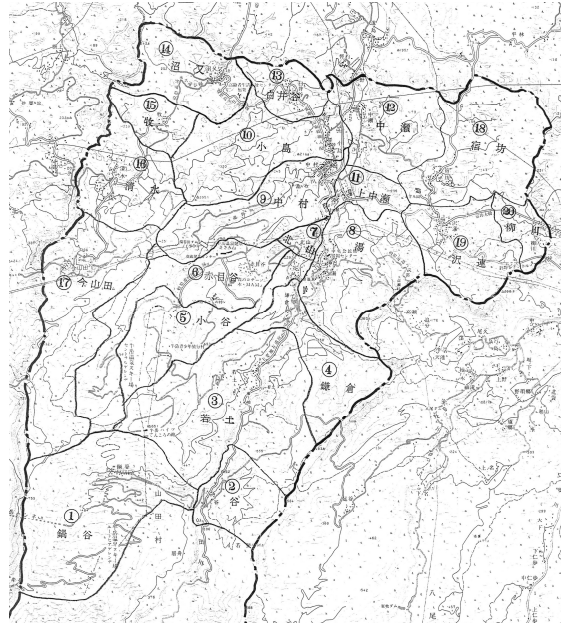


Figure17 各集落のアンケート回答率と集落の位置

注6) 「富山市空家基礎調査」によれば、日常的に利活用されていない空き家について、その理由としては「どうしてよいかわからないので放置している」が 26.5%と最も多い (Figure 18)。

注7) 「富山市空家基礎調査」によれば、日常的に利活用されていない空き家の、今後の利活用意向については、利活用への前向きな回答が半数以上となっている (Figure 19)。

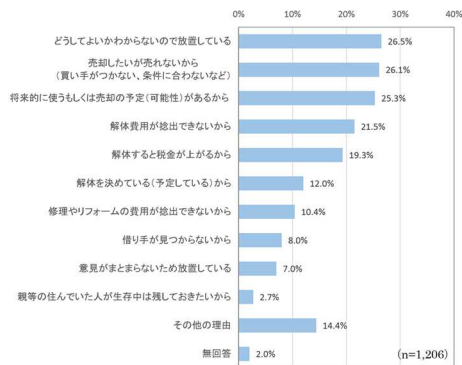


Figure 18 空家が利用されていない理由

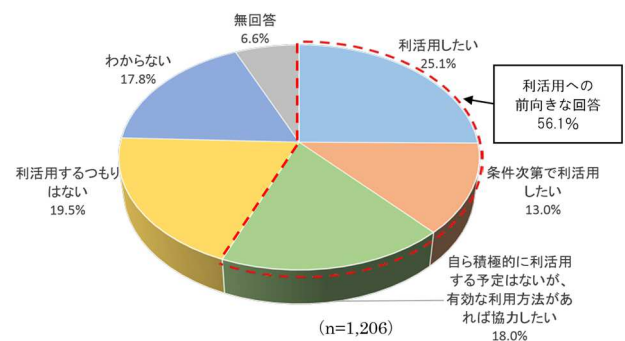


Figure 19 今後の空家利用

注8) 富山市では、空き家に関する多種多様な問題に対応するための体制整備の一環として、「富山市空き家対策官民連絡会議」を設置し、外部の事業者や NPO、法務関係者などとの連携により空き家対策を効果的に進めて意向としている。

山田村においては、空き家対策を推進する事業主体が必要と思われるが、その事業主体と市が連携して進めることは大変重要なことだと考える。